

トーキョーアーツアンドスペース

2022 年度夏のこどもワークショップ「マッチ、マッチ、マッチ。」レポート

講師：田中 彰（美術家）

開催日：2022 年 8 月 20 日(土)、8 月 21 日(日) 10:00-12:30

会場：トーキョーアーツアンドスペースレジデンシー 1 階スタジオ(東京都墨田区立川 2-14-7)

対象：小学 3 年生以上

トーキョーアーツアンドスペースでは、アーティストの創作活動を通じ、人々と作家や作品を多角的につなぐことを目的とした普及プログラムを実施している。2022 年度の夏のこどもワークショップでは、田中彰を講師に迎え木版画の制作を行った。田中は、植物や鳥、魚、地層、コーヒー豆やその生産者などをモチーフに、彫刻刀や伝熱ペンを用いて緻密な木版画を制作し、木を単なるメディウムではなく自然と人間との関係性を考察する存在と捉えている。これまで、コーヒー豆の生産現場でのフィールドリサーチや、日本各地で釣りをするなど、モチーフとなる自然と直接的に関わりながら制作をしてきた。プログラムの冒頭では、近年発表している魚の作品とともに自身の制作活動を紹介した。



プログラムのタイトル「マッチ、マッチ、マッチ。」は、「木を組み合わせる」、「モチーフの線を合わせて木をつなぐ」、「木にのせるインクの色を合わせる」という 3 つの「合わせる=マッチさせること」を意味している。さらに、ひとつめの「木を組み合わせる」は、3 つの版木の「種類」の組み合わせと、「構成」、つまり版木の「置き方の組み合わせ」の二重の意を表している。今回のプログラムで田中は、色や構成だけでなく、木を普段とは異なる方法で体験し、3 つの版木を参加者自身が選ぶことを重要視した。

プログラムの序盤には、参加者が版木となる約 20 種類の木のサンプルをひとつずつ伝熱ペンで焦がし、煙の香りや彫る抵抗感の違いから、木のそれぞれの特質を体感するワークを行った。ここでは木そのものをより直感的に体験するため、それぞれの種名を明かさず、参加者には手元のメモにひとつの木について感じたことを記入してもらった。そこには、「新築の家の香り」「不思議なおい」といった、記憶や感覚と結びついた感想が書き留められていた。



全てのサンプルを焦がし終わると、参加者は香りや彫り心地の好みや、色や木目のバランスを考慮しながら3種類の木の組み合わせを考えて版木を選んだ。版木を受け取って初めて木の種名が明かされ、ここでは参加者が電熱ペンで版木の裏面にその種名を改めて彫り込むことで、木の名前と焦がす香りや感触とを結びつけて記憶に刻むことを目指した。



彫りのモチーフは、参加者が持参したもののほか、海藻、錆びた缶、疑似餌の一部や貝といった、田中がアトリエ近くの海や海外で拾ってきたものなどから選ぶこともできた。その中には田中の作品や自作の鱈の干物なども並ぶ。モチーフが決まると、選んだ3つの版木の構成と、モチーフでどのようにそれぞれの木をつなげるかを考える。3つの版木を横並びにした正方形や、階段のようなスライド、T字型など配置はさまざまで、モチーフの線がそれらの版木を跨ぐものもあれば、それぞれの版木の中で完結したモチーフ同士が共鳴しつながりを生むデザインも見られた。



刷りの作業に移ると、3つの版木にのせる色の組み合わせを考えながら、刷り紙のどの位置にどのように版を置くかを決める。隙間を空けて配置することで生まれるニュアンスや、位置が数ミリずれるだけで変わる印象など、田中は参加者一人ずつの考えを聞き、それに合わせて微細な調整を行いながら見当をつけた。色の組み合わせは、同系色や反対色を組み合わせた3色、2つの版を同じ色にした2色、1色刷りとさまざまで、なかにはひとつの版にグラデーションをつけるものもあった。



田中はインクローラーの動かし方や刷りの圧力のかけ方、バレンを戻す場所など、作品が完成するまでに行うひとつひとつの動きの重要性を参加者に伝えており、終了後のアンケートには田中のこの丁寧なサポートを喜ぶ声が多く見られた。また、今回のワークショップは個人で作品を作り上げていく流れであったが、刷り作業が進むにつれ参加者たちはお互いの作品に関心を持ち、大人も子どもも刷り台を囲んで自然なコミュニケーションが生まれていたのが印象的であった。





完成後は展示スペースに出来上がった版画を飾り、他の参加者の作品を楽しむとともに、ホワイトキューブの空間の中で客観的に自身の作品を眺める体験をした。最後は田中が制作したカルトンに版画を挟み、箱に入れた版木とともに持ち帰った。マッチ箱を模し、表面に田中の木版画作品を貼ったこの箱は、刷り終わった版木も作品として飾ってもらうことを願い、3つの木が入るサイズで特別に用意された。



田中は、木の性質によって伝熱ペンで彫る力の入れ方や角度を細かく調整することを「木に自分自身を合わせる」と呼び、この感覚をぜひ3枚の版木の違いから感じて欲しいと語った。いつもとは異なる方法で自然を感じながら制作されたそれぞれの版画には、作り手と木の個性が色鮮やかに表れていた。

武智あさぎ（トーキョーアーツアンドスペース）
写真撮影：佐藤 基、トーキョーアーツアンドスペース